

15 『ジャングル・ジャンクション男版』成井豊＋真柴あずき（原作／高橋いさを）

○ジャンル／ファンタジー  
○ストーリー／サラリーマンとOLの出会いを描いたラブストーリー、刑事と脱獄囚の攻防を描いたサスペンスドラマ、改造人間と世界制服を企む悪の帝王の戦いを描いたSFアクション。出会はずの三つの物語の登場人物たちが、なぜか東京のど真ん中で出会ってしまった！「ここにいるみんなで続きを考えて、一つの物語を作ってあげようよ！」合計9人の登場人物たちが団結して、新たな物語が始まった！はたして9人はそれぞれのハッピーエンドに辿り着くことができるだろうか？ やっぱ無理？

○出演者／男8＋女1＝計9  
○上演時間／100分

登場人物

クドウ	（サラリーマン）
アツコ	（OL）
オザキ	（刑事）
スズキ	（刑事）
カンドリ	（脱走犯）
キョウタ	（改造人間）
ブルーナイト	（悪者）
タカオ	（キョウタの弟）
シンド博士	（キョウタの父）

オザキが現れる。車に乗り、エンジンをかける。クドウが現れる。電車に乗り、吊り革に手をかける。バイクにまたがり、エンジンをかける。

オザキ  
キョウタ  
クドウ  
オザキ  
クドウ  
オザキ  
キョウタ  
クドウ  
オザキ  
キョウタ  
クドウ  
オザキ  
キョウタ  
クドウ

(勢いよくカーブを曲がる)  
(勢いよくカーブを曲がる)  
(電車がカーブしてよろめく)  
(前の車を追い抜く)  
(前の車を次々と追い抜いていく)  
(隣の人の携帯電話を見て、睨まれる)  
(道路のデコボコでガタガタ揺れる)  
(道路のデコボコでガタガタ揺れる)  
(電車を降りて歩き出す)  
(信号で急停車する)  
(信号で急停車する)  
(自転車で急停車する)  
(自転車で急停車する)  
(イライラしている)  
(イライラしている)  
(二人を悠々と追い抜いていく)

オザキとキョウタが消える。

そこへ、アツコがやってくる。楽しそうに買い物をしている。両手がいっぱいになるまで買い物をして、店を出る。クドウが角を曲がる。アツコも、反対側から同じ角を曲がる。

クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ

あっ！  
うわっ！

キキーン！（とブレーキをかけて）ガシャン！（と転倒する）

ドワーッ！（と荷物を放り出して引っくり返る）

…痛い。

（飛び散った品物を見て）あーっ！

もう、どこ見て歩いてるんだよ。

動かないで！

えっ？

お願いだから、ジッとしてて。

何で。

あなたのお尻の下に――

僕のお尻の下に？

玉子のパックがあるの。



クドウ

のに。  
なあ、いい加減にしてくれないか？ さつきからグジグジグジグジ。確かに僕も悪かった。でも、君だってちゃんと前を見てなかっただろ？（とアツコに歩み寄る）

アツコ

（クドウの足元を指さして）そこ！ セロリ、踏んでる！

クドウ

ごめん！（と避けて）痛い。（と座り込む）

アツコ

どうかした？

クドウ

足首、ひねっちゃったみたいだ。

アツコ

大丈夫？

クドウ

大したことないよ。僕のことはいいから、もう行けば？

アツコ

（荷物をクドウに差し出して）これ、持ってて。

クドウ

何で。

アツコ

いいから。（と荷物を押しつけ、自転車を起こして）よかった。どこも壊

クドウ

れてない。はい、ありがとう。（と荷物を受け取りカゴに入れる）

アツコ

一体、どうするつもりなんだ？

クドウ

家まで送るよ。私が運転するから、後ろに乗って。（とクドウの手を取っ

クドウ

て、立ち上がらせる）

クドウ

これが彼女との出会いだった。男と女の出会いにもいろいろあるけど、会

クドウ

社の同僚だったとか、バイト先で知り合ったとか、そんなありきたりな出

クドウ

会いはわけが違う。これだけステキな出会いをってしまったら、もう恋

クドウ

に落ちるしかない。

アツコ

好きよ。

クドウ

僕もさ。……というふうに展開してもいいんだけど、それでは簡単すぎ



アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ

そうそう。(とペダルをこぎ始める)  
あ、そこ、右。

はい、右ね。(と曲がる)

そこ、左。

はい、左ね。(と曲がる)

その角でいいよ。

はい、角ね。(と止まる)

(降りて) どうもありがとう。

(降りて) 自転車、ここでいい？

うん。

(自転車のスタンドを立てて、荷物を取り) 足首、すぐに冷やした方がいいよ。

いよ。

ありがとう。じゃ。(と行こうとする)

あの。

(振り返って) 何？

名前、まだ聞いてなかったよね？

モノローグで言っただろう？ 僕の名前はクドウケイスケ。じゃ。(と行こうとする)

あの。

(振り返って) もう、何だよ。

私の名前は聞かなくていいの？

いいのいいの。また今度会った時に聞くから。(と行こうとする)

でも、もし二度と会えなかったら？



クドウ

バカだな。これは現実じゃないんだよ。きっとまた、信じられないような

アツコ

偶然が重なって、素敵な再会ができるよ。

クドウ

あ、そうか。そうそう。何たって、ラブ・ストーリーなんだから。

アツコ

ふつつかな相手役ですけど、よろしく。

クドウ

こちらこそ。じゃ、またね。

アツコ

またね。

クドウとアツコが別々の方向へ去る。

オザキとスズキがやってくる。オザキは運転席に乗り、スズキは助手席に乗る。車が走り出す。オザキは無線機で話をする。スズキは拳銃を出して弾丸を確認する。

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

拳銃、撃つたことはあるか？

いいえ、まだ。

撃つてみたいか？

はい。

バカ！ 撃ちたい気持ちにはわかるが、ギリギリまで我慢するんだ。

わかってます。いくら凶悪犯と言ったって、相手は人間なんですよね。

そうだ。親もいれば、兄弟もいる。

犬も飼ってるかもしれないね。

バカ！ 俺たちは見ての通りの者だが、見てわからなかったら困るので説明する。俺たちは刑事だ。スズキ。

何ですか、オザキさん。

オザキだ。俺たちは三日前、囚人護送車から脱走した殺人犯、カンドリニ

ンタロウを追っていた。そのカンドリを逮捕したのは、他にもないこの俺

だ。俺の回想。

そこへ、カンドリが走ってくる。

カンドリ

スズキ

オザキ

カンドリ

スズキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

オザキ

スズキ

カンドリ

スズキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

スズキ

(振り返って) よし、ここまで来れば、もう安心だ。

(車を降りて) オザキさん！ カカカカンドリです！

(車を降りて) バカ！ あれは俺の回想の中のカンドリだ。カンドリ！ (と拳銃を構えて) 殺人容疑で逮捕する！

何を言ってるんですか、刑事さん。俺に人が殺せるわけないでしょう？

嘘つけ！ 証拠は挙がってるんだ！

証拠って？

おまえは新宿のキャバクラで働く女と付き合っていた。その女が詐欺で逮捕されると、頭に来たおまえは新宿署に殴り込みをかけ、受付にいた警官三名を金属バットで叩き殺した。証拠は金属バットについていた、おまえの指紋だ。

向こうは拳銃を持っていたんだ。正当防衛ですよ。

警官が拳銃を持っているのは当たり前だろうが。

(カンドリに) どうして警察なんか殴り込みをかけたんだ。

ハルミは彼女いない歴三十年の俺に、好きだと言ってくれた。俺の女神なんだ。その女神が牢に入れられた。助けに行くのは当然だろう。

気持ちはわかるけど、ハルミちゃんにはヤクザのヒモがいたらしいぞ。

(スズキの首にナイフを突きつけて) 来るな！

スズキ！

来たら、この坊やの命はないぞ。

坊やじゃない！ 刑事だ！

オザキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

オザキ

カンドリ

オザキ

とうとう正体を現わしたな。カンドリ、落ち着いて考えろ。おまえはまだ、三人しか殺してないんだぞ。

三人しか、じゃない。三人も。

それが一体どうしたって言うんだ。俺なんか、犯人を十人も射殺してるんだぞ。さあ、もう恐くないな？（とカンドリに歩み寄ろうとする）

来るな、人殺し！

人殺しはおまえの方だろうが！　もういい。そんなに殺したいなら、殺しせ。三人が四人になったって、大した違いはない。

いいのか？　本当に殺すぞ。

ちよつと待て。スズキ、短いつきあいだったけど、さんざん世話したな。

礼を言え。

ありがとうございます。

あ、それからこの前貸した一万円、おまえが死んだら、財布から抜いとく

けど、いいかな？

はい。長い間、すいませんでした。

（カンドリに）胸は刺さなよ。財布が血で汚れるから。

（スズキに）おまえ、ひどい上司を持ったな。

何言ってるんだ。刑事っていうのは、殉職して初めて一人前になるんだ。

さあ、グズグズしてないで、スパッとやれ、スパッと。

バカにしやがって！（とナイフを振り上げる）

ドキュン！（と拳銃を撃つ）

うっ！（と腕を押さえる）

カンドリニインタロウ。神妙にお縄を頂戴しろ。（と手錠をかける）

カンドリ  
スズキ  
カンドリ  
オザキ  
放せ！ 放せ！  
ジタバタするな！ お上にも慈悲ってものがある。（と牢に入れる）  
今に見てる。必ず復讐してやるからな。  
はい、回想終了。（と車に戻る）

カンドリが消える。と思ったら、すぐにマイクを持って現れる。

カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
スズキ  
カンドリ  
オザキ  
（マイクに向かって）覚えとけよ。必ず……。  
うー……。 （と頭を抱える）  
（エコーがかかって）必ず必ず必ず……。  
オザキさん。  
必ず必ず……。  
どうしたんですか、オザキさん！  
ハッ！（と我に返って）いや、何でもない。

カンドリが消える。

スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
顔色、悪いですよ。運転、代わりましようか？  
カンドリは護送車から脱走した時、警察官から拳銃を奪っている。  
ええ、知ってます。  
今のはおまえに言ったんじゃない。ナレーションで状況を説明したんだ。  
あ、すみません。  
拳銃を奪われた警察官は、ナイフで首を切り裂かれて重体だ。いくら登場

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

オザキとスズキが去る。

しないキャラクターとは言っても、きつと痛かったに違いない。  
ピーピーピー。(と無線機のマネ)

(マイクを取って) はい、オザキです。

「カンドリシノブに拳銃を奪われ、重傷を負わされた警察官が、先程、出血多量で死亡しました」

…了解。(と切る)

オザキさん。

奪われた拳銃には、弾丸が六発入っているはず。

ということは、あと六人殺せるってことですね？

バカ！ その前に、俺たちが逮捕するんだ。ただし、万一、カンドリが撃

つてきても、すぐには撃ち返さないこと。

わかってます。一発でも多く撃たせるんですね。

さあ、着いた。(と車を止める)

いよいよですね。

くどいようだが、拳銃は最後の手段だ。

人命第一。これが、刑事ドラマの建て前ですよね。

俺は主人公だから、死ぬ心配はないけど、おまえは違う。気をつけないと、

すぐに殺される。

がんばります。

よし。じゃ、行こうか。(と車を降りる)

はい。(と車を降りる)

キョウタがやってくる。バイクにまたがり、走り出す。

キョウタ

その日、俺はムシヤクシヤしていた。それもこれも、キムチ牛井のせいだ。俺の名前はイノウエキョウタ。一応、プロのバイクレーサーだが、バイクレーサーでもキムチ牛井は食べる。それは、相撲取りがビッグマックを食べるのと同じだ。俺は誰が何と言おうと、キムチ牛井が好きだ。一日一回は食べないと気が済まない。その日もいつものように、なじみのすき家に向かったが、あろうことか、店は潰れていた。すき家が簡単に潰れるな！俺は心の中でそう叫び、仕方なく他のすき家を探しに出かけた。隣の町まで走って、やっとすき家の看板を発見したが、俺の走っている道は、車線変更がでなかつた。クソッ！俺はなおもバイクを走らせた。しかし、すき家はなかなか見つからない。辺りはすっかり暗くなり、雨さえ降ってきた。あと十分だけ走ってみようと思つた。俺はさらにスピードを上げた。その時、対向車のヘッドライトが、俺の目に突き刺さった。俺はボンヤリして、いつの間にか右車線を走っていたのだ。慌ててハンドスローモーションになり、雨でタイヤがスリップするのかわかった。すべてが

ゆっくりと暗くなる。

キョウタ

それからどのくらい時間が過ぎたのかわからない。目が覚めてみると、俺は、信じられない状況に置かれていた。

明るくなる。キョウタは何か固定されていて動けない。すぐそばに、タカオが立っている。

タカオ

あ、目を開けた。

キョウタ

ここはどこだ。おまえは誰だ。

タカオ

口をきいた。ちゃんと日本語をしゃべった。バンザイ！バンザイ！バンザイ！はいから、俺の質問に答えろ。

タカオ

(インターホンに向かって) 博士、おめでとうございます！クランケが

キョウタ

意識を回復しました！クランケ？ということは、ここは病院なのか？

タカオ

まあまあ、そんなに慌てないで。(とキョウタの脈を計る)

キョウタ

慌ててるのは、おまえの方だろう。

タカオ

僕は何だかの。僕は今、猛烈に感動してるんだから。

キョウタ

何が何だか、全然わからない。

タカオ

いいからいいから。博士が来たら、一から十まで説明してくれる。

キョウタ

博士って、誰だ。

そこへ、シンド博士がやってくる。



シンド博士  
キョウタ

シンド博士

タカオ

キョウタ

シンド博士

タカオ

キョウタ

シンド博士

タカオ

キョウタ

シンド博士

キョウタ

シンド博士

キョウタ

タカオ

キョウタ

私だ。ロボット工学の世界的権威、シンド博士とは私のことだ。また変なのが出てきた。

(タカオに) もういい。外してやりなさい。

はい。(とスイッチを押す)

(手足が自由になって) あんたがここの責任者か？

その通り。さあさあ、君の知りたいことを一から十まで説明してやろうじゃないか。

(キョウタに) あなたにとっては、かなりショックな内容かもしれないけど、心の準備はいいかい？

(深呼吸して) ……いいよ。

一週間前の午前零時、君はバイクで事故を起こした。

手足はバラバラ、内臓はグチャグチャ。はつきり言って、生きているのが不思議なくらいだった。

ちよつと待てよ！ そんな大怪我をしたのに、どうして今はピンピンしてるんだ？

なぜだと思う？(と笑う)

いやな予感。まさか、俺の体に何かしたんじゃないだろうな？

その通り。私は、君の命を助けるために、君の体の一部を機械と交換した。つまり、君は改造人間として蘇ったんだ。

ガン！

あなたの腕は岩をも砕き――

ドガッ！(と岩を砕く)



キヨウタ  
タカオ  
キヨウタ  
タカオ  
キヨウタ  
タカオ  
キヨウタ  
シンド博士  
キヨウタ  
タカオ  
キヨウタ  
シンド博士  
ブルーナイト  
キヨウタ

んだよ。  
嘘をつくな。俺の弟のタカオはこんな顔じゃない。  
この顔はブルーナイトに整形されたんだ。でも、これ、免許証。(と免許証を差し出す)  
(読む)「イノウエタカオ」。名前も生年月日も、弟のタカオと同じだった。ガーン!  
僕はブルーナイトに殺されたんじゃない。誘拐されたんだ。父さん・母さんと一緒に。  
それじゃ、俺の両親はまだ生きてるのか?  
母さんは去年亡くなった。でも、僕と父さんは逃げてきた。ブルーナイトを倒すために。  
ということは、この人は。(とシンド博士を見る)  
キヨウタ。(と両腕を広げて) 父さんだよ。  
ガーン! ……シヨックだった。しかし、事実だ。黙って受け入れるしかない。父さん!  
キヨウタ!  
タカオ!  
兄さん!  
ブルーナイトは、俺が必ずこの手で倒してみせます。  
頼んだぞ、キヨウタ。いや、アンアン・キヨウタ。  
それで、ブルーナイトは今、どこにいるんですか?  
ブワッハッハッハ!  
誰だ!

ブルーナイトが現れる。

ブルーナイト お待たせしました。地獄の帝王、ブルーナイト！（ポーズつき）

キョウタ さすが悪役、絶妙のタイピングで登場したな。

ブルーナイト 待ちくたびれたぞ、アイアン・キョウタ。おまえが作り出されないことに

タカオ は、私はただの変な人だ。ブワッハッハッハ！

ブルーナイト もう大丈夫だよ。これからは、兄さんが付き合っただけから。

ブルーナイト 頼むよ、ホント。ブルー・フィンガー！（とタカオを引き寄せる）

キョウタ タカオを放せ！

ブルーナイト ハイよ。（と放す）

キョウタ おいおい。

ブルーナイト 何だ、そのまぬけ面は。私がこいつをさらわないと、話が先に進まないも

キョウタ んな。どうする、さらってほしいか？　さらってほしいんだらう？　だっ

ブルーナイト たら、さらってくださいと言え！

キョウタ クソ……、夕御飯にしようか。

シンド博士 そうしよう。

タカオ 今日は、なんとマツタケごはんです！

キョウタ わあ、うまそう。（とブルーナイトを見て）あれ、あの人が、何だろう。

タカオ 大人のくせに変な格好して、バツカみたい。（と笑う）

ブルーナイト ごめん。私が悪かった。あなたたちあつての私、私あつてのあなたたち。

ブルーナイト 反省するから、変な人扱いだけはやめてください。

キョウタ

わかればいいんだ。タカオを放せ！

ブルーナイト

(タカオを引き寄せ) ブワツハツハツハ！ イヤだよーん。

シド博士

アイアン・キョウタ、戦いなさい！

キョウタ

はい。ブルーナイト、もうおまえの好きにはさせないぞ。

ブルーナイト

やるか。

キョウタ

うっ！

タカオ

兄さん！

キョウタ

胸が……。胸が苦しい！

シド博士

しまった、こんな時に。

ブルーナイト

ブワツハツハツハ！ この勝負、お預けにしてやろう。再会を楽しみにしているぞ、バイオニック・キョウタ。さらばだ。

ブルーナイトがタカオを連れて去る。

そこへ、クドウがやってくる。

クドウ

キョウタ

シンド博士

クドウ

シンド博士

クドウ

キョウタ

クドウ

シンド博士

クドウ

シンド博士

クドウ

シンド博士

キョウタ

あの、すいません。  
胸が、胸が張り裂けそうだ！  
アイアン・キョウタ、しっかりしろ！  
お取り込み中、すいません。ちよつと聞きたいことがあるんですが。  
何だ、君は。  
あなたたちこそ、ここで何をしてるんですか？  
見ればわかるだろう、苦しんでるんだ。  
どこか悪いんですか？ だったら、こんな所で「胸が胸が」って言ってないで、病院へ行った方が。  
ご親切はありたいが、通行人を相手にしてる暇はないんだ。さあさあ、あっちへ行つて。(とクドウを押し)  
ちよつと待って。僕はこの物語の主人公ですよ。通行人扱いはやめてください。  
おもしろいことを言う通行人だな。  
お兄さん、ブルーナイトはこのアイアン・キョウタが必ず倒します。だから、安心して通り過ぎてください。

クドウ

だから、通行人じゃないんだってば！

そこへ、オザキとスズキが飛び出す。

スズキ

動くな！（と拳銃を構える）

オザキ

カンドリ！ 神妙にお縄を頂戴しろ！（と拳銃を構える）

クドウ

ひやあ、撃たないで！（と両手を挙げる）

キョウタ

何だ、おまえら。

オザキ

おまえたちこそ、ここで何をしている。

シンド博士

（スズキに）大人のくせに、オモチャのピストルなんか振り回すんじゃない！

スズキ

オモチャじゃない、本物だ！

オザキ

（シンド博士に）はぐらかさないで、俺の質問に答えろ。ここで一体何を

している。

キョウタ

それは俺の科白だ。おまえたちこそ、ここへ何しに来たんだ。

スズキ

生意気な口をきくと、痛い目に遇うぞ。

キョウタ

痛い目？ おもしろい。遇わせてもらおうじゃないか。

スズキ

舐めやがって！（とキョウタの腕をつかむ）

キョウタ

（スズキの腕をつかむ）

スズキ

痛い痛い痛い痛い！

シンド博士

（キョウタに）それぐらいにしておけ。おまえが本気を出したら、腕が割

キョウタ

り箸になってしまう。  
（スズキの腕を放す）

スズキ  
オザキ  
キョウタ  
シンド博士  
オザキ  
クドウ

オザキさん、こいつ、物凄い力です！  
見てればわかる。(キョウタに) 貴様、一体何者だ。  
アイアン・キョウタだ。  
その生みの親だ。  
(クドウに) そのの、ボートしてる男。おまえは何者だ。  
クドウケイスケ、普通のサラリーマンです。悪いことは何もしてません。

そこへ、アツコが走ってくる。後を追って、カンドリも走ってくる。

カンドリ  
アツコ  
カンドリ  
クドウ  
カンドリ  
クドウ  
アツコ  
オザキ  
スズキ  
カンドリ

(アツコに) 頼む、俺と一緒に逃げてくれ！  
そんなこと急に言われても困ります。私にはクドウくんというカッコイ  
彼氏がいるんですから。  
どこにいるんだ、そのカッコイ彼氏は。俺がブツ殺してやる。  
ここにいますよ。  
(クドウを見て) どこにいるんだ、そのカッコイ彼氏は。  
(アツコに) 何なんだい、この男は？  
知らないよ。向こうで、あなたが来るのを待ってたら、いきなり、一緒に  
逃げてくれたって。  
カンドリ。おまえってやつは、このクソ忙しい時に。  
よその物語の女を引っかけて、どうするんだよ。  
違いますよ、刑事さん。この女を人質にしたら、話が盛り上がるかなって  
思ったから。



そこへ、ブルーナイトがやってくる。後を追って、タカオもやってくる。

ブルーナイト

オザキ

スズキ

シンド博士

キョウタ

タカオ

ブルーナイト

キョウタ

ブルーナイト

キョウタ

アツコ

キョウタ

クドウ

アツコ

クドウ

アツコ

タカオ

カンドリ

ブルッハッハッハ！ あんまり遅いから、こっちから迎えに来てやったぞ！  
また変なのが出てきた。

もしかして、この男がブルーナイト？

その通りだ。この派手な衣裳。いかにも地獄の帝王って感じだろう。

（ブルーナイトに）どうして戻って来たんだ。これから、おまえのアジト

へ乗り込もうと思ってたのに。

だったら、グズグズしてないで、すぐに来てよ。僕が殺されたら、どうす

るの？

（キョウタに）困るよ、アイちゃん。

その呼び方はやめろ。

（オザキたちに気づいて）ん？ こいつらは何だ？

それは俺の方が聞きたい。

（クドウに）何なの、この人。

ふんっ！（と巨大な岩を持ち上げて）ドガッ！（と砕く）

（アツコに）改造人間だって。

あ、なるほど。でもさ、どうして改造人間がラブ・ストーリーに出てきて、

岩なんか砕いてるの？

さあ。

さあつて、しっかりしてよ。あなたはこの物語の主人公でしょう？

ちよつと待って。この物語の主人公は兄さんだよ。

え？ 主人公は刑事さんじゃないのか？

シンド博士

待ちなさい！ この物語の主人公は、アイアン・キョウタに決まってるだろう。

ブルーナイト

そうだそうだ。そうじゃないと困る！

スズキ

証拠はあるのか？

ブルーナイト

証拠？

スズキ

この改造人間が、この物語の主人公だっていう証拠。

ブルーナイト

証拠は……。

シンド博士

あるとも。見せてやりなさい、アイアン・キョウタ。

キョウタ

でも、わざわざやらなくても——

シンド博士

私たちはわかってるからいい。わかってないこの人たちに、おまえの実力を思い知らせてやりなさい。

キョウタ

父さんがそこまで言うなら……。（キョウタだけに照明があたる）俺の名

ブルーナイト

前はイノウエキョウタ。バイクの事故で瀕死の重傷を負ったが、父親のシンド博士と、弟のタカオの手によって、改造人間アイアン・キョウタとして蘇った。地獄の帝王・ブルーナイトを倒すために。（照明が元に戻る）

タカオ

いいぞ、アイちゃん！

シンド博士

兄さん、カッコイイ！

スズキ

よっ、日本一！

カンドリ

俺たちもやりましょうよ。ハードなヤツ。

オザキ

しようがないなあ。（オザキだけに照明があたる）俺は捜査一課の刑事、

オザキだ。俺は三日前、囚人護送車から脱走した殺人犯、カンドリニントウを、同僚のスズキ刑事とともに追っていた。（照明が元に戻る）

スズキ  
カンドリ  
アツコ  
クドウ  
ブルーナイト  
アツコ  
クドウ  
アツコ

同僚のスズキです！  
これが奪った拳銃です！ まだ一発も撃ってませーん！  
（クドウに）あなたの番だよ。  
えっ？  
どうした、自信がないのか。  
（クドウに）大丈夫だよ。私がついてるから。  
うん。（クドウだけに照明があたる）僕はどこにでもいる普通のサラリーマン、クドウケイスケ。僕はある日、一見おとなしそうだけど、実は気が強い、笑顔のカワイイ女性と出会った。（照明が元に戻る）  
皆さん！ これがその、カワイイ笑顔です！（周囲の冷たい視線に気づいて）失礼しました。

オザキ

ブルーナイト

オザキ

キョウタ

シンド博士

タカオ

キョウタ

タカオ

アツコ

クドウ

シンド博士

タカオ

スズキ

カンドリ

スズキ

カンドリ

スズキ

スズキ

これでハッキリしたな。

ということは、つまり――

つまり、この物語には、主人公が三人いるわけだ。

父さん、これは一体どういことですか？

それはつまり……、どういうことなんだ、タカオ？

まず最初に考えられるのは、作者が主人公をわざと三人にしたって場合。

何のために？

話をおもしろくするためじゃないかな。僕はあんまりいいアイデアと

思わないけど。

そうかなあ。私は結構おもしろいと思うけど。

冗談じゃない。どうして僕が、刑事や改造人間なんかと共演しなきゃいけないんだ。

(タカオに)で、次に考えられるのは？

次に考えられるのは、三つの物語が何かの理由で混ぜってしまった場合。

何かの理由って？

たとえば、俺たちの物語が書いてある原稿用紙が、机の上に積んであった

んだ。

それで？

カンドリ

オザキ  
アツコ

オザキ  
スズキ

タカオ  
シンド博士

タカオ  
シンド博士

オザキ  
アツコ

オザキ  
クドウ

カンドリ  
シンド博士

そこへ、ネコとネズミがやってきた。ネコとネズミは仲が悪い。当然、追いかけてこが始めた。ネズミは机に飛び乗って、原稿用紙の上を走った。そこへネコが飛びかかって、原稿用紙はゴチャゴチャになっちゃった。カンドリ、おまえに頭を使う仕事は向いてない。しばらく黙ってろ。たとえば、私たちの物語が載ってる本を、三冊いっぺんに読んでる女がいたの。女は三冊の本を、交互にちよつとずつ読んでいった。すると、頭の中で三つの物語がゴチャゴチャになっちゃった。

やつとまともな推理が出てきたようだな。

それって、結構ありそうな話ですよ。

あるある。僕なんか飽きっぽいから、いっぺんに五冊読んだこともある。

おまえ、その五冊はちゃんと最後まで読んだんだろうな？

そうしようとは思ったんだけど、どれがどんな話だったか、わからなくなっちゃって、結局全部捨てちゃった。

捨てちゃった？ おまえってやつは、なんでもつたいないことをするんだ。

父さん、ちよつと待って。(アツコに) 俺たちの物語を読んでる女が、タカオと同じことをしたらどうなるんだ？

おしまいだよ。私たちは永遠にゴチャゴチャのまま。

ということは、僕たちの愛もこれでおしまい？

それだけなら、まだいい。もしその女が、さらに別の本を読み始めたら？

別の物語の人たちが、またここへやってくるだろうな。

別の物語って？

妖怪ものとか。

妖怪ものとか。

ブルーナイト

クドウ

キョウタ

クドウ

キョウタ

クドウ

キョウタ

アツコ

オザキ

クドウ

アツコ

クドウ

オザキ

クドウ

キョウタ

クドウ

キョウタ

クドウ

猥褻ものとか。

イヤだ！ そんなの絶対にイヤだ！

まあまあ、落ち着いて。

これが落ち着いていられる状況か？

要は、別の物語の人たちが来る前に、物語を終わらせればいいわけだろう。

どうやって終わらせるんだ。物語は全部で三つもあるのに。

三つの物語を、絡み合わせて進めればいいじゃないか。

絡み合わせて？

そうだ。ここにいるみんなで続きを考えて、一つの物語を作っていけばいいんだ。

バカバカしい。そんなことができるわけないだろう？

できないかなあ。

ジャンルの違いはどうするんだ。僕はラブ・ストーリー畑の人間だよ。ア

クシヨン畑のことはまるつきりわからないし、ましてや改造人間畑のこと

なんて……。

畑は違っても、元はと言えば、みんな絵空事だろうが。

そりゃ、あんたはいいよ。拳銃バンバン撃って、見せ場が作れるんだから。

でも、僕はどうすればいい？ あんたたちがバンバン撃ち合ってる間、リ

ングサイドで応援しろっていうのか？

おまえもリングの上で立ってばいいじゃないか。

立ってどうするんだ。あんたと戦えって言うのか？ あんたに殴られたら、

僕も彼女も鼻血ブーだよ。鼻血をたらした男と女が、どうやってラブ・ス

トリーをやるわけ？



スズキ  
カンドリ  
オザキ  
三人  
スズキ  
オザキ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ

オザキさん。

刑事さん、しっかり。

心配いらない。こつちには拳銃がある。しかも三丁。

(拳銃を構えて) シャキン！

ハードなアクション、ぶちかましましょうね。

いざとなったら、皆殺しだ。ドキュン！

クドウくん、ビール。(とビールを差し出す)

おう。(とコップを差し出す)

(ビールを注ぎながら) 私たち、なんか分が悪そうだから、お酒飲んだ勢

いで、パーツと行こう。

(ビールを飲み干して) そうだよね。お酒でも入ってなくちゃ、ラブ・ス

トリーなんかやってられないもんね。



クドウ  
キョウタ  
オザキ  
九人  
オザキ  
クドウ  
キョウタ  
オザキ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
オザキ  
カンドリ  
オザキ  
カンドリ  
カンドリ

それは―――  
それは―――  
それは―――  
十月の、ある風の強い日のことだった。  
俺たちは相変わらず、脱走したカンドリニントロウを追っていた。ズキユルズギユルズキユルズキユル。(とハンドルを切る)  
俺はタカオをさらったブルーナイトを、俺の全能力を使って追っていた。  
アイアン・イヤー、ホワンホワンホワンホワン……。(と耳をすまして何か発見し) ヒュン！ (と走る)  
僕は玉子の彼女のこと忘れられず、毎日玉子を割るたびに、あのカワイイ笑顔を思い出していた。トントン、パカ。(と玉子を割る)  
ニカ。(と笑顔)  
トントン、パカ。(と玉子を割る)  
ニカ。(と笑顔)  
カンドリは、警察官から奪った拳銃を所持している。  
フツフツフツ。これでもう恐いものはない。(と拳銃を構える)  
弾丸は六発。最悪の場合、六人の犠牲者が出る。  
これで合計十人だ。あんたと同じだな、刑事さん。ドキュン！

スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ

キョウタ

ブルーナイト  
キョウタ

シンド博士

キョウタ  
シンド博士

キョウタ

タカオ  
キョウタ

言わせておけば、好き勝手なことを！（と車から降りようとして）わーっ！  
（スズキの手をつかんで）バカ！ あれは俺の空想の中のカンドリだ。  
（車の中に戻って）すみません。

一刻も早く、あいつを逮捕しなければ。俺は、ジワジワとこみ上げてくる  
焦燥感を、苦々しく噛みしめていた。ジャリジャリジャリジャリ。

必死の追跡にもかかわらず、ブルーナイトの行方は一向につかめなかった。  
あつちかと思えばこつち。こつちかと思えばそつち。まるで俺をあざ笑う  
かのように、ヤツの足取りは滅茶苦茶だった。

ブワッハッハッハ！ 鬼さん、こちら。（と通り過ぎる）

走りながらふと横を見ると、新幹線が止まっていた。いや、止まっていた  
のではない。俺と同じ速度で走っていたのだ。窓越しに手を振ってくれた  
子供たちに、笑顔で応えることも忘れない。（とニッコリ笑って）だが、

新幹線を追い抜いた瞬間、俺は再び、あの激痛に襲われた。胸が！  
キョウタ。実を言うと、おまえの体はまだ完成してないんだ。その痛みは、  
現在入っている人工心臓MH501型に、おまえの体が拒否反応を起こし  
ているせいなんだ。

そうだったんですか。胸が！

私が現在開発している新型人工心臓MH502型さえ完成すれば、痛みは  
きれいさっぱり消える。もう少しの辛抱だ。

わかりました。ヒュン！（と走り出して）大阪付近で、俺はついにタカオ  
の声をキャッチした。ホワンホワンホワンホワン……。 （と耳をすます）

兄さん……。

タカオ、その声はタカオだな？ ホワンホワンホワンホワン……。

タカオ  
キヨウタ  
タカオ  
キヨウタ

ブルーナイト

キヨウタ  
クドウ

アッコ  
クドウ  
アッコ  
クドウ  
アッコ  
クドウ

兄さん、僕はここだよ……。

タカオ、今どこにいるんだ。ホワンホワンホワン……。

僕がいるのはピーピーガー……。

ダメだ。ノイズが多くて聞き取れない。アイアン・イヤー、パワー・アツプ！  
もうかりまつか。ぼちぼちでんな。毎度おおきに。もうムチャクチャでござりまするがな。好っきやねん。もう辛抱たまらんわ。何さらすねん。  
いてまうど、われ。(と通り過ぎる)

オーツ！(と苦しむ)

その日も、いつもと同じ平凡な一日だった。いつもと同じ会社、いつもと同じ机、いつもと同じ仕事。それなのに、僕の心はなぜか明るく弾んでいた。それはたぶん、玉子の彼女のせいだ。今日こそは、彼女と再会できるかもしれない。そんな素敵な予感がして、僕は残業を早めに切り上げた。

(鏡に向かって髪型を整える)

彼女もこの都会のどこかで、同じ予感に震えているかもしれない。

ブルブル。(とドアを開けて歩き出す)

僕は会社を後にして、彼女との再会へ向かって歩き出した。行き先はもちろん、スーパーマーケットだ。

(買い物をしている)

(買い物しながら)僕は明日の朝食のために、パンとミルクと野菜を買った。残るは玉子だ。けれど、これがなかなか見つからない。僕はお店の中を二周もして、やっと目指すコーナーを発見した。ところがそこには、ワンパックしか残ってなかった。(と玉子に手を伸ばす)



オザキ

スズキ

オザキ  
キョウタ

九人

園地へ遊びに行けって言ってるんだ。

バカ！これはカンドリからの挑戦状だ。どうせ逃げ切れないなら、逮捕される前に、俺と決着をつけてやるって言ってるんだ。

オザキさん。

受けてやるうじやないか、おまえの挑戦を。

一見メチャクチャに思えたブルーナイトの足取りだが、追っていくうちにある形を表していることに気づいた。それは、日本全国を股にかけた、大きな大きな渦巻き模様だった。空から見れば、まるで超特大の蚊取線香が日本列島を覆っているように見えただろう。蚊取線香は、外側から内側に向かって燃えていく。炎の行きつくその先が、ブルーナイトの目的地に違いない。俺の体に埋め込まれたマイクロー・コンピューターが、その目的地を割り出した。そう、そこはデステイニーランド！  
運命の遊園地！

クドウ

ちょうどその頃、僕と彼女はデステイニーランドで、初めてのデートに胸をときめかせていた。

アツコ  
クドウ

クドウくん、今日はカメラを持ってきたよ。(とカメラを見せる)  
二人の写真、いっぱい撮ろうね。あ、僕、あれに乗りたい。

クドウとアツコがいろんな乗物に乗る。乗った後、ドッと疲れて座り込む。

クドウ

二人だけで遊園地の雰囲気を出すのは、なかなか難しい。

アツコ

あー、疲れた。ちよっと休憩しない？

クドウ

おなかが空いた、はらぺこだ。

アツコ

こんな時のために、ジャーソン！ 私が弁当を作ってきました。(と弁当当を広げる)

クドウ

わー、すごい！ ありがとう、ハニー。

アツコ

なんのなんの。この玉子焼き、自信作なんだ。どんどん食べて。

クドウ

いただきますーす。(と食べて) ほへ、ほっへほほひひひ。

アツコ

とってもおいしい？

クドウ

(うなづく)

アツコ

よかった。他の人に食べてもらうの初めてだから、朝五時に起きてガンバ

クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ クドウ アツコ

ったんだ。ガンバってよかった。

あー、おいしかった。ごちそうさま。

あれ、私の分は？ どうして全部食べちゃうの？

さあ、食後の運動だ。今度はあそこに入らない？（と指さす）

えっ？ お化け屋敷？

（係員に）すいません、大人二枚。

（係員に）このお化け屋敷、怖いですか？ ……心臓麻痺で死者二名？

わー、楽しみ！ さあ、入ろう入ろう。（とお化け屋敷に入る）

わっ！（と驚かす）

え？（と振り返って、驚かされたことに気づき）わー！ ビックリした！

もう、やめるよな。

ごめんごめん。怖くなったら、私の腕につかまっていいよ。

わっ！（と驚かす）

うっ！（と心臓を押さえて止まる）

ハニー、しっかりして！

（クドウの腕につかまって）あー、ビックリした。心臓が口から飛び出す

かと思った。

こんな微笑ましいエピソードを繰り返しながら、僕たちは奥へと進んだ。

どれぐらい歩いた頃だろうか。僕たちは奇妙な通路を発見した。

あれ？ 左の方にも行けるみたいだ。

よし、行ってみよう。

でも、出口は右って書いてあるよ。

いいからいいから。（と進むが）あれ？ もう行き止まりだ。





タカオが透明カプセルの中に立っている。

タカオ  
クドウ  
タカオ  
アツコ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
アツコ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
アツコ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
アツコ  
クドウ

助けて！

お化け屋敷の続きかな？

違う違う。僕はお化けじゃない！

何か言ってるみたいけど。

兄さんに、アイアン・キョウタに、僕がここにいるって伝えて！

口だけパクパクして、金魚みたい。つんつん。(とつついて)おなか空い

たんでちゆか？

ふざけんなてめえ。

ちよつと待って。こっちの声は聞こえてるみたいだよ。(タカオに)聞こ

えてますか？

バツチリ聞こえてます！(と手で丸を作る)

本当だ。壊れたテレビみたいで、おもしろいね。

おもしろがってないで、何とかしてよ！

一体誰がこんなひどいことをしたの？

(口を大きく動かして)ブルーナイト。

何？全然わからない。

ブ。

う？

(オナラのポーズをして)ブ！

わかった。プーだ。

違うよ。スーだよ。

タカオ  
クドウ  
タカオ  
タカオ  
アツコ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
タカオ  
アツコ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
アツコ  
クドウ  
タカオ  
アツコ  
クドウ

そうじゃなくて、(とオナラのポーズをして) ブ。  
わかった。プッスーだ。

なぜわからないんだ、おまえら！

それから約二時間、僕たちのトンチンカンなやりとりは続いたが、ついに

「ブルーナイト」という言葉は伝わらなかった。

(タカオに) そこから出すには、どうすればいいの？

そのレバーを倒すんだよ、ボケ。

この三本のレバーの、どれかを倒せばいいんじゃないかな。

そうだ。どうしてそれに気が付かなかったんだ。僕のバカ。

これ？

違う違う。その右の、白いレバー。

これかな？

それは絶対に触っちゃダメだ！ それを倒すと、カプセルの中の空気がな

くなつて、僕はもうおしまいだ！

それだって言ってるみたいだよ。

わざと間違えてるのか、おまえら！

こつちかな？

わかればいいんだ、わかれば。早く倒して！

シッ！ 誰か来たみたい。

あつちに隠れよう！ (タカオに) またね、金魚ちゃん。

クドウとアツコが去る。

そこへ、ブルーナイトとカンドリがやってくる。

ブルーナイト  
カンドリ

ブワッハッハッハ！  
（周囲を見回して）へえー、ここがブルさんの隠れ家ですか。お化け屋敷の中なんて、考えましたね。

ブルーナイト  
カンドリ

ブワッハッハッハ！  
お化け屋敷の中なら、ブルさんがいても目立ちませんもんね。

ブルーナイト  
カンドリ

（タカオに気づいて）あれ、この人は？  
アイアン・キョウタの弟、タカオだ。

ブルーナイト  
カンドリ

タカオさんですか。（タカオに）はじめまして、カンドリです。  
挨拶はいい！（タカオに）どうだ、籠の中の鳥、いや、金魚鉢の中の金魚

ブルーナイト  
タカオ

の気分は。

ブルーナイト  
カンドリ

兄さん、助けて！  
ブワッハッハッハ！ 騒いでもムダだ。

ブルーナイト  
カンドリ

この人、何か悪いことをしたんですか？  
なぜそんなことを聞く。

カンドリ

だって、こんな狭い所に閉じ込めたら、かわいいそうじゃないですか。

ブルーナイト  
カンドリ  
ブルーナイト

ちよつと耳を貸せ。(と手招き)  
はい。(とブルーナイトに歩み寄る)

(耳元で) バカツタレ! いいか。アイアン・キョウタは、私と互角に戦える唯一の敵なんだ。しかし、弟のこいつを捕まえておけば、私に手出しできないだろうが。

カンドリ  
あ、そうか。なるほど。そういうことか。いやー、納得納得。

タカオ  
あんた、本当にわかっているのか?

ブルーナイト  
(カンドリに) ちなみに聞いておくけど、なぜこいつを捕まえておけば、私に手出しできないんだ?

カンドリ  
そんなの決まってるじゃないですか。こいつがアイアン・キョウタの弟だからですよ。

ブルーナイト  
だから、なぜアイアン・キョウタの弟だと手出しできないんだ?  
んー。(考え込む)

タカオ  
やっぱりわかってなかったのか。

ブルーナイト  
(カンドリに) 本当はわかっているんだよな? ただ、それを表現する言葉が見つからないだけなんだよな?

カンドリ  
すみません、全然わからないうで、できればヒントを。

ブルーナイト  
もういい。頭が痛くなってきた。

カンドリ  
風邪ですか?

ブルーナイト  
いいのいいの、気にしないで。そんなことより、刑事たちに手がかりは残

カンドリ  
してきたらどうな?

ブルーナイト  
よし。アイアン・キョウタも、もうすぐここへ来る。みんなまとめて、透

タカオ  
ブルーナイト  
カンドリ  
ブルーナイト

明カプセルに閉じ込めてやる。  
兄さんが、そんな手に引っ掛かると思ってるのか？  
そして邪魔者がいなくなったら、いよいよ世界征服計画のスタートだ。  
何ですか、世界征服計画って？

耳の穴をかつぽじって、よく聞け。ここに取りいだしたのが、情熱薬科  
大学の研究所から盗んで、いや、頂戴してきた悪魔の錠剤、MとW。この  
二種類の薬が溶け込んだ水を、男と女に飲ませればあーら不思議。二人の  
間にできた子供は、皆すべてアライグマになってしまふという恐るべき代  
物だ。これぞ名付けて、アライグマ・プロジェクト！もちろん、人間を  
アライグマに変えて、一体何の得があるのか。世界征服がしたかったら、  
もっと別のやり方があるんじゃないのか。そういう疑問も多々あると思う  
が、難しいことは一切忘れてほしい。ただこの私が、あくまでも個人的に、  
全人類をアライグマに変身させてみたい！　そう願っていることだけのこ  
となのだ。ブワッハッハッハッハ！

そこへ、クドウとアツコが笑いながら出てくる。

タカオ  
ブルーナイト  
アツコ  
クドウ  
ブルーナイト  
クドウ

バカ！　どうして出てくるんだ！  
（クドウとアツコに）何だ、おまえら。  
あ、しまった。  
あーはっはっは。（ブルーナイトに）アライグマ。あーはっはっは。  
笑ってないで、早く答えろ。  
全人類がアライグマ。あーはっはっは。



クドウ  
アツコ  
クドウ  
カンドリ  
アツコ  
ブルーナイト  
クドウ

お風呂屋さん？  
この顔にピンと来たら110番。  
わかった。確か、連続殺人犯の――  
カンドリニタロウだ。  
（ブルーナイトを指さして）で、この人は――  
地獄の帝王、ブルーナイトだ！  
こうして僕とハニーは、玉子の出会いからは想像もつかない、  
なうねりの中に、放り込まれてしまったのだった！  
物語の巨大

オザキとスズキがやってくる。車を運転している。

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

彼らが物語の巨大なうねりの中へ放り込まれた頃、俺たちはカンドリの隠れ家で発見した入園券を手がかりに、デステイニールランドへ向かっていた。

ピーピーピー。(無線機のマネ)

(マイクを取って) はい、オザキです。

「緊急手配です。今から約三時間前、情熱薬科大学の研究所で、強盗殺人事件が発生しました」

「研究所に強盗？ 盗まれたのは何ですか。」

「開発中の薬品です。開発していた研究員が被害者なので、詳しいことはわかっていません」

了解。(と切ろうとする)

「被害者は首をねじ切られて死亡。犯人はゴリラなみの怪力の持ち主と思われまます。充分注意してください」

了解。(と切る)

どうします？

無視無視。このクソ忙しい時に、他の事件に関わってられるか。でも、相手がゴリラなら、撃つても構わないですよね？



オザキ バカ！ そんなに撃ちたかったら、遊園地で赤鬼でも撃て！

そこへ、キョウタが走ってくる。

スズキ 危ない！

オザキ キキーン！（とブレーキをかける）

キョウタ ボーン！（とはねられる）

二人 グワシヤ！

キョウタ （倒れる）

二人 （倒れて逆さになる）

スズキ ……痛い。

オザキ 大丈夫か？

何とか、生きてます。

今の、人間だよな？

ええ。（キョウタを見つけて）あつ、あそこに倒れてます。

（ドアを開こうとするが、開かない）スズキ、そっちのドアは開くか。

（ドアを開こうとするが、開かない）ダメです。

オザキ 頭に……

ケガしたんですか？

頭に血が昇ってきて、辛い。

（立ち上がって、二人に近づき）ふんっ！（と車を元に戻し）バリバリバ

リン！（とドアをもぎ取り）安全運転しようね。それじゃ。ヒュン！

キョウタ

キョウウタが走り去る。

スズキ　：　今の、何だったんですか。

オザキ　：　人間じゃないか？

スズキ　ただの人間が車のドアをバリバリバリなんてできますか？

オザキ　じゃ、一体何だって言うんだ。

スズキ　わかった、きつと改造人間ですよ！

オザキ　バカ！　しかし、どう考えても結論はそれしかなかった。

スズキ　そうか、改造人間か。サインもらっとけばよかったな。

オザキ　スズキ。さっきの無線、覚えてるか？

スズキ　薬科大学がどうしたってやつですか？

オザキ　犯人はゴリラなみの怪力の持ち主だって言ってたよな？

スズキ　ええ、言っていました。それがどうかしましたか？

オザキ　バカ！　あいつがそのゴリラなんだよ。

スズキ　えっ？

オザキ　もちろん、改造人間の姿はとっくに見えなくなっていた。しかし、ヤツが

走り抜けたアスファルトの表面は、ブスブスと黒く焦げついていて。

スズキ　ブスブスブスブス……。

オザキ　（車に乗って）ヤツの後を追うぞ。

スズキ　（車に乗って）はい！

オザキ・スズキが去る。  
キョウウタが走ってくる。

キョウタ

デステイニールランドまであと一息という所まで迫った時、俺はシシド博士が呼びかける声をキャッチした。アイアン・イヤー！ ホワンホワンホワンホワン……。

遠くに、シシド博士が現れる。

シシド博士

キョウタ、ベリーグッドニュースだ！ 新型人工心臓MH502型がついに完成したぞ！

キョウタ

本当ですか？

シシド博士

これで、おまえはもう恐いものなしだ。さあ、早く交換に来い。

シシド博士の所へ、ブルーナイトが現れる。

ブルーナイト

そうはさせるか！

二人

ブルーナイト！

シシド博士

タカオはどこにいる？ タカオを返せ！

ブルーナイト

やかましい！ それがアイアン・キョウタの新型人工心臓だな？

シシド博士

なぜそれを。

ブルーナイト

こっちによこせ。

シシド博士

おまえなんかに渡すものか！

ブルーナイト

ブワッハッハッハ！ ムダな抵抗はやめろ！（とシシド博士を殴り倒し、

人工心臓を奪う）

キョウタ

父さん！

ブルーナイト

壊しちゃおうかな。でも、壊すと話が終わっちゃうしな。アイアン・キョウタ、返してほしいか？ 返してほしかったら、返してチョンマゲと言え。

キョウタ

それだけは勘弁してくれ。チョンマゲだけは……。

ブルーナイト

言わないと、この人工心臓は木っ端微塵になるぞ。

キョウタ

わかった。言うから待て。(小声で) 返してチョンマ……。

ブルーナイト

ゲはどうした。ゲは。

キョウタ

返してチョンマゲ。

ブルーナイト

よし。おまえの努力に免じて、今回は返してやろう。さあ、受け取れよ。

シンド博士

やめろ！ こんなどころから投げるな！

ブルーナイト

やかましい！ (とシンド博士を殴り倒して) ブルー・キーツク！ (と人工

キョウタ

心臓を蹴る)

シンド博士

父さん、今助けに行きます！

キョウタ

私のことはいいから、人工心臓を取りに行くんだ。早く！  
クソッ！ 俺は、父さんに心の中で謝り、人工心臓を追った。

キョウタが走り去る。ブルーナイトがシンド博士を引きずって去る。  
オザキとスズキが走ってくる。

スズキ

待ってくださいよ、オザキさん。

オザキ

情けない声を出すな。

スズキ

だって、もう十キロ以上走ってますよ。

オザキ

十キロが何だ！ と口では言いながら、実際は辛かった。改造人間の足跡



オザキとスズキが去る。

クドウ・アツコ・タカオが透明カプセルの中に立っている。その横で、カンドリが雑誌を読んでいる。

クドウ

彼らが改造人間を追いかけてデステイニールランドへ向かっている頃、僕はちはブルーナイトの手によって、透明カプセルに閉じ込められていた。

アツコ

(カンドリに) お願いです！ ここから出してください！

タカオ

(カンドリに) こちら！ ここから出さねえか！

アツコ

(カンドリに) 出してくれたら、おいしいカルボナーラを作ってあげますよ。

クドウ

(カンドリに) 出さねえと、ケツの穴から手え突っ込んで奥歯ガタガタ言わせたり、おら！

アツコ

声は聞こえないけど、物凄いやことを言ってるみたいだな。

クドウ

もうダメだ。私はここで死ぬんだ。

アツコ

(アツコに) ねえ、ハニー！

クドウ

まだこんなに若いのに。なんて悲しい人生なの。(と泣く)

アツコ

泣いてないで、こっち向いてよ！ ハニーってば！

アツコ

それもこれも、みんなクドウくんが悪いんだ。私はあれほど右だって言ったのに……。 (とクドウを見て) あれ？

クドウ  
アツコ  
クドウ

アツコ

クドウ  
カンドリ  
クドウ  
カンドリ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
タカオ  
アツコ

よかった。やつと気づいてくれた。  
どうかしたの？

その人（タカオを指さす）と（戸を開ける）僕たち（自分たちを指さす）  
で（手を指さす）協力して（握手）、そいつ（カンドリを指さす）に（指  
を二本立てる）このカプセル（カプセルを指さす）を（しっぽ）開けさせ  
よう（両手を交差して開く）。

彼（タカオを指さす）と（戸を開ける）私たち（自分たちを指さす）で（  
手を指さす）握手して（握手）、その人に（カンドリを指さす）ピースし  
て（指を二本立てる）、このカプセル（カプセルを指さす）を（しっぽ）  
大魔神（両手を交差して開く）。

今、何て言った？ 大魔神？ 違う！ 大魔神じゃない！  
（クドウを見ている）

あーん、早く出してよー。（と泣く）  
バカだなあ。泣いてらあ。（と雑誌を読み始める）

（アツコに）だから、そのレバーを、何とかして倒させるんだよ！  
え？ よくわかんないよ。

こうなったら色じかけよ。色じかけ！  
クドウくん。私も愛してるよ。

そうじゃなくて、あいつに向かって、色じかけで迫るの。  
あ、そうか。そういうことか。（とカンドリに）ハロー、ダーリン。

ちよつと、何してるの？  
あなたにやってるんじゃないの。（とカンドリに）はーい、私といいこと  
しない？（と服を脱ぎ始める）





クドウ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
二人  
タカオ  
タカオ  
二人  
タカオ  
二人  
タカオ  
タカオ  
二人  
タカオ  
タカオ  
二人  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
タカオ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ

さあ、早く逃げないと、ブルーナイトが戻ってくる。

兄さん、聞こえる？ 僕はここだよ。

しっかりして！ まだ助からないって決まったわけじゃないんだよ。

違うよ。僕は兄さんに助けを求めているんだ。兄さん、聞こえる？ 僕はこ

こだよ。

しっかりして！

だから、僕の兄さんはアイアン・キョウタなの。

何なの、そのアイアン・キョウタっていうのは。

かくかくしかじか。

えーっ？ ホントに？

兄さんがここから百キロ以内になれば、僕の声をキャッチできるんだ。

へー、便利だねえ。

兄さん、聞こえる？ 僕はここだよ。

僕もここだよ。

早く助けに来て！

このままジツとしても仕方ない。僕、上まで登ってみるよ。うまく登れ

たら、助けを呼んでくる。(と行こうとする)

待って。私も連れて行って。

君はここに残ってて。彼一人じゃ心配だから。

兄さん、僕はここだよ。

(クドウに)でも、それはまずいよ。

どうして？

だって、あなたが助けを呼んできたなら、この事件を解決したのは、あなた

クドウ  
アツコ  
クドウ  
タカオ  
カンドリ  
クドウ  
アツコ  
クドウ

ってことになるじゃない。  
それでいいんだよ。主人公は僕なんだから。  
でも、ヒイロンである、私の立場は？  
つべこべ言っていないで、拳銃を貸して。（とアツコの手から拳銃を取る）  
兄さん！ 僕はここだよー！  
ブルさん！ 俺はどうやら騙されたみたいでーす！  
（アツコに）じゃ、またね。  
私の立場は？  
僕は、長い洞窟のようなスロープを腹這いになって登っていった。勾配が  
かなりきつかったので、途中で何度も滑り落ちそうになった。（と滑り落  
ちるが、踏みとどまって）しかし、僕はくじけない。

シシド博士が転がりながらクドウの横を通り過ぎる。

クドウ  
何だ何だ何だ！ その時、僕はスロープが二つに分かれていることに気が  
付いた。あつ、また誰か来る。えーい、こっちだ！

クドウが去る。違う場所からブルーナイトがやってくる。

ブルーナイト  
ブワッハッハッハ！

ブルーナイトが去る。

キョウタがやってくる。フラフラして、今にも倒れそうだ。後を追って、オザキとスズキがやってくる。拳銃を構える。

スズキ

オザキ

キョウタ

スズキ

ヨウタ

二人

キョウタ

スズキ

オザキ

スズキ

キョウタ

スズキ

オザキ

スズキ

オザキ

動くな！

改造人間、神妙にお縄を頂戴しろ！

人工心臓を……、人工心臓をよこせ……。 (と倒れる)

とうとう観念したか。口ほどにもないヤツだ。 (と手錠をかけようとする) キ

(ビクンと動く)

ギヤアーツ！ (と離れる)

(動かなくなる)

……オザキさん。

油断するんじゃない。

わかっています。(キョウタに) おい、改造人間、無駄な抵抗はやめろ。

(動かない)

聞いているのか、改造人間！

バカ！ 急に大きな声を出すな！

でも、こいつピクリともしませんよ。

さつきビョーンって動いただろう、ビョーンって。

スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ

もう大丈夫なんじゃないですか？

じゃ、おまえが揺すってみろ。

俺がですか？

ほら、拳銃を貸せ。(とスズキの拳銃を取って)何かあったら、俺がすぐに撃ってやるから。

でも……

でも何だ。

確か、『エイリアン』にもこんなシーンがありましたよね？

それがどうした。

俺の役の人、エイリアンにガバって。(と泣く)

バカ！ 刑事が泣くな！ 何が『エイリアン』だ。

オザキさんは見てないから、そんな残酷なことが言えるんです。

『エイリアン』なら見たよ。1から4まで全部。その俺がついてるんだから、大丈夫大丈夫。

だったら、オザキさんがやってくださいよ。

わかった。やればいいんだろう、やれば。

俺の拳銃、返してください。

しょうがないな。あれ？ 取れない。拳銃が手にくっついてる。

そんなバカな。

あ、そうだ。さっき手にアロン・アルファ塗つといたんだ。ごめんごめん。

さあ、やれ。

そうまでして、俺に『エイリアン』の二の舞を踏ませたいんですか。わかりましたよ。

オザキ  
スズキ  
いいから、早く。  
援護、お願いします。

オザキ  
スズキ  
おい、どうした！ しっかりしろ！（と揺すって、すぐに離れる）

キョウタ  
オザキ  
（動かない）  
死んでるのか？

スズキ  
（キョウタに）おい、死んでるのか？ 死んでるなら、死んでますって言え。（とゆっくり近づく）

キョウタ  
スズキ  
（ビクンと動く）  
ひーっ！

オザキ  
スズキ  
ドキュン！ ドキュン！ ドキュン！ ドキュン！  
ドキュン！ ドキュン！

スズキ  
オザキ  
オザキさん、もうそのへんで——  
カチカチカチカチ。（弾丸がなくなっただの）

スズキ  
オザキ  
ずるいなあ、自分ばかり撃って。  
どうだ？ 死んだか？

スズキ  
わかりません。前と同じです。

キョウタが倒れている段の下から、クドウが顔を出す。（オザキとスズキには見えない）

クドウ  
オザキ  
撃たないでください。

スズキ  
いいえ、何も。何か言ったか？



オザキ  
クドウ  
オザキ  
クドウ

(クドウに) おまえ、脱皮するの  
か？  
はあ？  
これ以上とぼけると、撃つ！  
撃たないでください！ 今、出ますから。

オザキとスズキが拳銃を構える。と、キョウタの下からクドウが出てくる。

クドウ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
クドウ  
オザキ  
クドウ  
オザキ  
スズキ  
クドウ  
オザキ  
スズキ  
クドウ

(キョウタを見て) 何ですか、この人？ (オザキたちに) どうも。  
スズキ。  
はい。  
このことは、恥ずかしいから誰にも言うな。  
二人だけの秘密ですね。  
あなたたち、刑事だって言いましたよね？ 実は今、大変な事件が起きて  
るんです。すぐに僕と来てください。  
どこへ？  
(指さして) すぐそこ、デステイニールランドです。  
俺たちもそこへ行くところだったんだ。  
(クドウに) この穴はどこに続いているんだ？  
お化け屋敷の地下です。  
わかった。スズキ、おまえはそいつを見張ってる。  
一人でですか？  
何かあったら、死んだフリをしろ。  
(キョウタを指して) 何なんですか、あの人。お腹でも空いてるんですか？



オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
クドウ  
オザキ  
スズキ  
オザキ

いいから、早く案内しろ。  
はい。(と穴に入る)  
オザキさん、これが一生のお別れだ、なんてことはないですよ？  
バカ！ 危なくなったら、ケータイで呼ぶんだ。(と穴に入る)  
健闘を祈ります。(と敬礼)  
(敬礼を返して、穴に消える)

クドウとオザキがやってくる。

クドウ 刑事さん、ここです！　ここがブルーナイトの秘密基地です！　あれ？  
オザキ 誰もいないじゃない。  
クドウ おかしいなあ。確かにさっきまでいたんだけど。

クドウの背中に、シシド博士が倒れかかる。

クドウ わーっ！（とシシドの体を突き飛ばす）  
シシド博士 うー。（と倒れる）  
オザキ （拳銃を構えて）出たな、ブルーナイト！  
クドウ 待ってください。この人はブルーナイトじゃありません。もしかしたら、ブルーナイトが作った改造人間じゃないですか？  
オザキ そうか、改造人間か。でも、これは失敗作だな。  
シシド博士 （上半身を起こして）うー。（と首を横に振る）  
クドウ 何か言いたいみたいですよ。  
オザキ 油断するな。相手は怪物だ。  
クドウ （シシド博士に）どうしたんですか、怪物さん。何か僕たちに言いたいこと

シンド博士  
クドウ博士  
シンド博士  
クドウ博士  
オザキ  
クドウ博士  
シンド博士  
クドウ博士  
シンド博士  
クドウ博士  
オザキ  
クドウ博士  
シンド博士  
クドウ博士  
オザキ  
クドウ博士  
シンド博士  
クドウ博士  
シンド博士  
クドウ博士

とがあるんですか？  
オモ、オモモ……。  
おもちが食べたい？  
オモカゲ、チヨ、チヨ、チヨ……。  
面影チヨチヨチヨ？（オザキに）一体何のことでしよう？  
オモチャのチャチャチャに關係あるかもしれぬ。  
（シンド博士に）オモチャのチャチャチャに關係ありますか？  
うー。（と首を横に振る）  
（オザキに）ないそうです。  
チヨ、チヨ、チヨスイチ……。  
貯水池？　そうか、面影貯水池ですね？  
うー。（とうなずく）  
面影貯水池がどうしたんだ。  
わかった！　ブルーナイトは、きっとそこへ行ったんですよ！  
なぜ貯水池なんかへ？  
さつき説明したでしょう？　全人類をアライグマにするためにです。  
薬科大学で盗んだ薬で？  
そうです。その薬を、面影貯水池に投げ込むつもりなんですよ。  
（シンド博士に）カンドリも、一緒に行ったのか？  
うー。（うなずく）  
僕のハニーも？  
うー。（うなずく）  
アイアン・キョウタの弟さんも？



オザキ  
クドウ  
オザキ  
クドウ  
オザキ

阻止してみせます。  
ちよつと待て！

どうしたんですか、刑事さん？

(シシド博士に) 危ない危ない。危うく引つかかるところだった。うまく化けたつもりでも、このオザキマコトの目はごまかせないぞ。

それじゃ、この人はシシド博士じゃないんですか？

(シシド博士に) これが動かぬ証拠だ！

オザキがシシド博士の白衣をめくる。白衣の内側に、○に「ブ」の字が書いてある。

クドウ  
オザキ

あつ！

透けて見えてたんだよ、バカタレが。

シシド博士  
バレちゃあ、しょうがない。ブワッハッハッハ！

シシド博士の背後から、ブルーナイトが現れる。シシド博士はその場に倒れる。

クドウ  
ブルーナイト

あつ！ あんたは――

オザキ  
ブルーナイト

地獄の帝王、ブルーナイト！

ブルーナイト  
カーン。(とはね返す)

ついで出てきたな、怪物め。ドキュン！ (と撃つ)

オザキ  
ブルーナイト

くそー。ドキュン！

ブルーナイト  
カーン。カーン。カーン。カーン。ブルー・ビーム！

ドキュン！  
ドキュン！  
ドキュン！

二人  
うわーっ！ (と頭を抱えて苦しむ)

ブルーナイト  
二人  
ブルーナイト

ブルー・フリーズ！  
うわーっ！（と凍りつく）

ブワッハッハッハ！（と薬を取り出して）これが何だかわかるか？ おま  
えらが探していた、アライグマ・タブレットだ。ほしいか？ ほしいよな  
？ じゃ、ここに置いとくぞ。（と床に置いて）さあ、遠慮せずに持って  
いけ。どうした、いらぬのか？ いらぬなら、私が使うぞ。（と拾っ  
て）じゃ、仕方ない。おまえらの子孫をアライグマに変えるしかないな。  
それじゃ、ちよっくら出かけて、人類の未来を真っ暗にしてくるわ。おま  
えらは、そこで指をくわえて待っている。ブルー・フィンガー！  
うわーっ！（と指をくわえる）  
一生そうやってろ。じゃあな。ブワッハッハッハ！

二人  
ブルーナイト  
ブルーナイトが去る。

オザキ  
クドウ  
シンド博士  
オザキ  
クドウ  
シンド博士  
オザキ  
クドウ  
シンド博士  
オザキ  
クドウ  
シンド博士  
オザキ  
クドウ  
シンド博士

何だあいつ、言いたいこと言いやがって。何がブルー・フィンガーだ。そのまま英語にしたらだけじゃないか。  
シンド博士！起きてください！  
いつまで寝てるんだ。あんたの出番だぞ。  
うっ！（と気が付いて、二人を見る）  
そんなにじろじろ見るな！  
ブルー・フィンガーにやられたんだな？  
知ってるんですか？  
当たり前だ。ブルーナイトを倒すために、二十年も研究を続けてきたんだから。ヤア！キエー！（と気合いで解く）  
刑事さん、急いでアイアン・キョウタに連絡を取りましょう。  
そうだ、すっかり忘れてた。  
君たち、アイアン・キョウタに会ったのか？  
会ったって言うか、見たって言うか。  
アイアン・キョウタは、今、どこにいるんだ？  
この遊園地のすぐそばで寝てます。  
なぜそんな所だ？  
動かなくなっただよ、突然。

シンド博士  
クドウ博士  
シンド博士  
オザキ  
シンド博士  
クドウ博士  
オザキ  
シンド博士  
クドウ博士  
オザキ  
シンド博士  
クドウ博士  
オザキ

そうか。やっぱりMH501型では無理だったのか。  
何ですか、それ？  
旧型の人工心臓。アイアン・キョウタの体は、それに拒否反応を起こしたんだ。  
それじゃ、あの改造人間はもう使いものにならないわけ？  
いんや。新型人工心臓MH502型さえ取りつけられれば元通りになるんだが。取りつけましようよ、早く。  
それがここにはないんだ。アイアン・キョウタが取りに行ったんだが、持ってなかったか？  
さあ……。  
持っていないから、倒れちゃったんじゃないんですか？  
それじゃ、あの改造人間は……。  
おーっ！（と泣く）  
博士のくせに、泣くな！　いくら改造人間だって、動かなければ、ただの粗大ゴミだ。こうなったら、俺たちだけで何とかしよう。じいさん、ブルーナイトはどこへ行ったか知ってるか？  
おーっ！（と泣く）  
知らないのか？　行き先がわからなきや、追いかけてやがらないぞ。（とレバーを上げて）ガクン、ウイーン。あららら？  
透明カプセルです。この中に閉じ込められてたんですよ。あれ？  
何だ。  
刑事さん、ここを見てください、ここ！  
何か、文字が書いてあるな。





クドウ  
シンド博士  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
シンド博士  
スズキ  
シンド博士  
スズキ  
シンド博士  
スズキ  
シンド博士

金属製の新型人工心臓さえあれば……。  
今、何て言いました？  
どこことなく人間の心臓を連想させる、金属製の新型人工心臓。  
その一言を待ってたんだよ、じいさん！  
（車に向かつて）止まれ！ 警察だあ！  
（携帯電話を出して）スズキ！ 聞こえるか？ スズキ！  
（携帯電話を出して）すみません。すぐに車を拾って出発しますから。  
出発しなくていい。物語のあっちとこっちを一つに結び付ける科白が、ついに出てきたんだ。  
それじゃ、いよいよ……。  
いよいよアイアン・キョウタを復活させる場面が来たんだ。捨ててないだろうな？ あの、空から降ってきた金属製の物体は！  
もちろんですよ。この場面のために、この通り！  
後は頼んだぞ、じいさん！（と携帯電話をシンド博士に渡す）  
（携帯電話に向かつて）私はシンド博士。アイアン・キョウタの生みの親だ。今から、私の言う通りに作業してくれ。いいな？  
任せてください。何のために、こんな所でじっと待ってたと思うんですか。既に、旧型人工心臓MH501型は取り外してあるな？  
はい、取り外してあります。  
では、新型人工心臓をよく見ろ。どこかに、アルファベットのFの文字を型取った突起物があるだろう。  
はい、ありました。  
そのアルファベットのついてる方が前。つまり、両手で人工心臓を持つ

スズキ  
シシド博士

た時、君の進行方向に一致した方が前だ。  
はい、進行方向に一致させました。

スズキ

め。  
はい、覗き込みました。

シシド博士

ちちょうど、左の乳首の裏側にあたる場所に何が見える？

スズキ

えーと、表裏が反対になった、アルファベットのFの文字のくぼみが見えます。

シシド博士

その通り。そのFの字のくぼみに、新型人工心臓のFの字の突起物をはめ

スズキ

込むんだ。  
はい、はめ込みます。(と入れて)カチン。

シシド博士

カチンという音がしたか？

スズキ

はい、しました。

シシド博士

その音と同時に、背中の中央にある三ケタの数字が000とデジタル表示

スズキ

されたな？  
はい、000と表示されました。

シシド博士

その、それぞれの数字の下に、3つの小さなつまみがあるな？

スズキ

はい、つまみが3つあります。

シシド博士

そのつまみを左から：：。いいか？ここは絶対に間違えるなよ。右じゃ

スズキ

なくて、左のつまみから順番に――

シシド博士

左のつまみから順番に――

スズキ

777と表示させるんだ。  
777、スリーセブンですね？

シンド博士  
スズキ  
シンド博士  
スズキ  
シンド博士  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
クドウ  
オザキ  
キョウタ  
スズキ  
オザキ  
スズキ  
キョウタ  
四人

それが完了した時点で、アイアン・キョウタは復活する。まず最初は左の  
つまみ。

カチカチカチカチカチカチカチカチ……、7。

次は真ん中のつまみ。

カチカチカチカチカチカチカチカチ……、7。

そして最後は右のつまみ。

カチカチカチカチカチカチカチカチ……、7。完了しました！

どうだ？

変化ありません。倒れたままです。

そんなあ。

(シンド博士に) 変化しないって言ってるぞ。

(ゆつくりと動き出す)

オザキさん！

どうした！

改造人間が、アイアン・キョウタが動き出しました！

(悠然と立ち上がって) アイアン・キョウタだ！

よーし！

クドウ  
キョウタ

シンド博士  
キョウタ

オザキ  
キョウタ

スズキ  
キョウタ

シンド博士  
キョウタ

シンド博士  
キョウタ  
シンド博士

（携帯電話に向かつて）というわけなんです。

そうかそうかそうだったのか！ 現在俺の置かれている状況と、様々な人間関係を、隅から隅まで一瞬にして把握したぞ！

キョウタ、新型人工心臓の調子はどうだ。

最高ですよ、父さん。温泉に行つて、ビールを浴びるほど飲んで、十二時間寝た後のように爽やかな気分です。

ここまで何分で来られる。

分？ ふふーん。分なんてかかりませんよ。（スズキに）さあ、俺の腕につかまれ。

失礼します。（とつかまる）

行くぞ。ヒュン！ お待たせ。

キョウタ！

心配をかけてすみませんでした、父さん。直ちに哀愁ダムへ急行して、ブルーナイトの陰謀を阻止してきます。

キョウタ、一つ言い忘れていた。ブルーナイトの弱点は、腋の下だ。

腋の下？

そうだ。何の論理的根拠もないが、とにかく腋の下なんだ。おまえのアイアン・フィンガーで、死ぬまでくすぐってやれ。

キョウタ  
シンド博士

わかりました。(三人に) さあ、みんな、俺の腕につかまれ。いよいよクライマックスだ。しっかり盛り上げてきてくれ。

キョウタ  
シンド博士

任せてください。今まで寝ていた分を、倍にして取り返してきます。健闘を祈る。

キョウタ

(三人に) 準備はいいか？

三人

オーケイ！

キョウタ

アイアン・キョウタだ！ シュワーツ！ (と飛ぶ)

三人

うわーっ！ (と飛ぶ)

違う場所へ、アツコとタカオが転がり込む。両手を後ろで縛られている。後から、ブルナイトがやってくる。

ブルナイト

ブワッハッハッハ！ いよいよクライマックスだ。張り切って行こうね。

タカオ

兄さん！ 僕はここだよ！ 早く助けに来て！

アツコ

クドウくん！ 私はここよ！ なんて悲しい人生なの！

ブルナイト

もっと泣け！ もっとわめけ！ いくら助けを求めたって、アイアン・キョウタは来ないんだ！

そこへ、カンドリがやってくる。手にはナイフ。

カンドリ

ブルさん、準備オーケイです。

ブルナイト

ご苦労ご苦労。一人残らず始末してきたらうな？

カンドリ

はい、ちよろいもんでした。

ブルーナイト  
カンドリ

当たり前だ。ダム管理ビルに強盗が入るとは、誰も思わないからな。こいつらはどうします？

アツコ  
ブルーナイト

（手首のロープをほどこうとしていたが、ふと止めて）助けてください！心配するな。殺しはしない。アライグマ・タブレットをここへ投げ込んだら、まず最初におまえらに飲ませてやる。

カンドリ

そいつは楽しみです。こいつらがアライグマに変身するところが見られるってわけだ。

ブルーナイト

おまえ、全然わかってないな。アライグマになるのはこいつらじゃない。こいつらの子供だ。

カンドリ  
ブルーナイト

でも、こいつら、夫婦じゃありませんよ。

アツコ

もういい。とにかく笑おう。ブワッハッハッハ！

カンドリ  
アツコ

（ロープがほどけて）やった！  
何か言ったか？  
いえ、別に。

キョウタ

シュワーツ！

オザキ

哀愁ダムはまだか？

スズキ

（と指さして）あの大きな水たまり！  
（下を見て）オザキさん、俺、高い所はダメなんです！

オザキ

（と目を両手で覆って）うわーっ！（と落ちる）

スズキ  
オザキ  
キョウタ

なるほど。（と目を両手で覆って）うわーっ！（と落ちる）  
何やってるんだ、この忙しい時に。シュワーツ！（とスズキを追う）

スズキ

(キョウタの手をつかんで) あーん、怖かったよー!

ブルーナイト

それでは、これよりアライグマ・プロジェクトを開始する。こっちがアライグマ・タブレットM。こっちがアライグマ・タブレットWだ。

カンドリ

前から聞こうと思つてたんですけど、MとWってどういう意味ですか?

ブルーナイト

おまえ以外の人間はとくに気が付いてるぞ。(アツコに) なあ?

アツコ

(タカオのロープをほどこうとしていたが、ふと止めて) さあ、私は気が

タカオ

付かなかつたけど。  
まさかとは思うけど、MはMAN、WはWOMANの頭文字?

ブルーナイト

そうだ。物凄い安直さだろう。ほら、カンドリ。(とタブレットMを差し

カンドリ

出して) こっちはおまえが投げる。

ブルーナイト

(受け取つて) 俺がですか?

カンドリ

プロデェクトつて言つたつて、要するにただ投げ込むだけだ。一人でやつ

カンドリ

てもおもしろくない。

ブルーナイト

身に余る光栄です。カンドリニインタロウ、全力でやります!

カンドリ

それでは、人類の真つ暗な未来を祝福して。

二人

ブルさんの世界征服への第一歩を祝福して。

二人

乾杯!(とタブレットの瓶で乾杯する)

アツコ

(タカオのロープがほどけて) やつた!

二人

(瓶を投げようとして) 一、二、の――

アツコ

えいっ!(とブルーナイトに体当たり)

ブルーナイト

あっ!(とタブレットを落とす)

タカオ

こんちくしょう!(とカンドリからタブレットを奪う)



キョウウタ

シュワーツ！

クドウ

あの大きなビルは何ですか？

オザキ

哀愁ダムの管理ビルだ、たぶん。

スズキ

オザキさん、屋上に誰かいます！

キョウタ

見えた！ ブルーナイトだ！

オザキ

カンドリも一緒か？

クドウ

ハニー！ 僕だよ！ 助けに来たよ！

キョウタ

バカ！ 手を振るな！ バランスが崩れる！

ブルーナイト

どこだ！ アライグマ・タブレットはどこだ！

タカオが走り去る。

ブルーナイト

何をボケっとしてるんだ！ あの男を追え！

カンドリ

はい！

カンドリが走り去る。

ブルーナイト

（アツコに）タブレットはどこに隠した。

アツコ

知らない。（と後ずさり）

ブルーナイト

返せ。（と迫る）

アツコ

知らないって言ってるでしょう。あーっ！（と足を踏み外しそうになる）

ブルーナイト  
アツコ  
もう後はないぞ。さあ、どうする？（と迫る）  
うわーっ！（と落ちる）

クドウ  
スズキ  
オザキ  
キョウタ  
四人  
（手を滑らせて）うわーっ！ 落ちる！（とスズキにつかまる）  
重いー！ 放せー！  
バカ！ 暴れるんじゃない！（とスズキを叩く）  
ダメだ！ もう限界だ！（と態勢を崩す）  
うわーっ！（とバラバラに落ちる）

アツコ  
ブルーナイト  
うわーっ！（と落ちるが、両手で縁につかまる）  
危ないところだったな。しかし、悪役はこういう時に、必ずこれをやることになってるんだ。グリグリグリ。（とアツコの手を踏む）  
痛い痛い痛い！

アツコ  
ブルーナイト  
前から一度やってみたかったんだ。グリグリグリ。  
ちよつと待って！ まさか、本気で落とすつもりじゃないよね？  
本気に決まってるだろう。グリグリグリ。（と反対側の手を踏む）  
でも、私はクドウくんの相手役なんだよ。私が死んだら、私とクドウくんの物語はどうなるの？

ブルーナイト  
アツコ  
アツコ  
アツコ  
おまえ、『世界の中心で愛を叫ぶ』を見てないのか？ ラブストーリーっていうのは、主役のどっちか片方が死んだ方が盛り上がるんだ。  
冗談じゃない。話を盛り上げるために、殺されてたまるもんですか。  
だったら、自分で何とかしろ。グリグリグリ！  
うわーっ！（と落ちる）

キョウタ  
アツコ

(飛んできて、アツコを受け止めて) 大丈夫かい、お嬢さん？  
ありがとう、アイアン・キョウタ。

クドウ  
スズキ

うわーっ！(と落ちる)  
ひよえーっ！(と落ちる)

オザキ  
三人

誰かー！ 俺を受け止めるーっ！(と落ちる)  
ボツチャーン！ ジュブジュブジュブジュブ。(と沈む)  
ーシュワー。(と泳ぐ) ふはっ！(息を吐く)

オザキ  
スズキ  
クドウ

スズキ、大丈夫か？  
何とか生きてます。  
刑事さん、早く岸へ！

三人が泳ぎながら去る。

タカオが飛び出す。後を追って、カンドリが飛び出す。

タカオ 兄さん、聞こえる？ 僕とタブレットMはここだよ。  
 カンドリ そいつは、俺がブルさんからもらったんだ。いつおまえにやるって言った？  
 タカオ あっ、いい女！（と遠くを指さす）  
 カンドリ もうその手には引つかからないよ。（とタカオの腕をつかむ）

そこへ、クドウが飛び出す。

クドウ （拳銃を構えて）動くな！  
 カンドリ あ、それ、俺の拳銃。  
 クドウ タカオくんを放せ。ただのサラリーマンでも、撃つ時は撃つぞ。  
 カンドリ （タカオの首にナイフを突きつけて）これでも撃てるか？  
 クドウ ナイフなんて、どこに持ってたんだけ！  
 カンドリ 細かいことは気にするな。さあ、拳銃を返せ！  
 クドウ わかった。ほら。（と拳銃を床に置く）

そこへ、アツコが飛び出す。

アツコ  
タカオ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
カンドリ  
アツコ

(カンドリに飛びついて)二人とも、逃げて！  
ありがとう！(と走り去る)

クドウくんも早く！  
でも、一人で大丈夫？

今まで黙ってたけど、私、柔道三段なんだ。

ブルさん、助けて！俺はここです！

マネしたってダメ。ブルーナイトは来ないよ。

そこへ、ブルーナイトが現れる。

ブルーナイト  
アツコ  
ブルーナイト  
アツコ  
ブルーナイト  
カンドリ  
ブルーナイト  
カンドリ  
アツコ  
カンドリ  
アツコ  
カンドリ

ブルッハッハッハ！来ちゃったよーん。

それ以上近寄ると、あなたのかわいい部下が痛い目に遭うよ。

ブルー・ビーム！

うわーっ！(と倒れる)

(カンドリに)後は自分でできるな？

はい。(と拳銃を拾う)

遠くからおまえのことを応援しているぞ。(と去る)

(アツコに拳銃を向けて)覚悟はいいか？

よくない。

ついに私にも拳銃を撃つ場面が来た。

まあまあ、そんなに興奮しないで。私を殺して何になるの？

純情な男心を弄んでおいて、よくそんなことが言えるな。おまえだけは絶

アツコ 対に殺してやる。  
気持ちはわかるけど、やめた方がいいよ。私が死んだら、クドウくんを助

ける人間がいなくなる。それでクドウくんまで死んだら、私たちの物語は  
おしまいになる。

クドウ 僕は大丈夫だよ。たとえ一人になっても、最後まで戦い抜く。

アツコ あなたって男は、どこまでデリカシーがないの？

カンドリ つべこべ言っていないで、なかよく二人であの世へ行け！

違う場所に、オザキとスズキが飛び出す。

オザキ スズキ！ どうだった？

スズキ この階にもいませんでした。もっと上じゃないですか？

そこへ、ブルーナイトが飛び出す。

ブルーナイト ブルー・ビーム！

二人 うおーっ！（と苦しむ）

そこへ、キョウタが飛び出す。

キョウタ アイアン・フラッシュ！

ブルーナイト うおーっ！（と苦しみながら去る）

スズキ ありがとう、アイアン・キョウタ。

オザキ  
キョウタ

(キョウタに) カンドリは見なかったか？  
アイアン・イヤー！ ホワンホワンホワンホワン……。

違う場所で、さっきの場面が繰り返されている。

カンドリ  
アツコ  
カンドリ  
キョウタ

(アツコに拳銃を向けて) 覚悟はいいか？  
よくない。  
ついに俺にも拳銃を撃つ場面が来た。  
(オザキとスズキに) よく聞いてくれ。カンドリは、このすぐ上の階にいる。天井の厚さは約三十センチ。あんたたちの拳銃で充分に撃ち抜ける。天井に向かって構えて。

二人  
キョウタ

よし。(天井を狙う)

カンドリが俺の真上に来たら、ゴー・サインを出す。そうしたら、俺の真上を狙って一斉に撃つんだ。わかったか？

二人

了解！

僕は大丈夫だよ。たとえ一人になっても、最後まで戦い抜く。

アツコ

あなたって男は、どこまでデリカシーがないの？

カンドリ

つべこべ言わないで、なかよく二人であの世へ行け！

キョウタ

ここだ！(と天井を指さす)

カンドリ

死ぬ！

二人

ドキュン！ ドキュン！ ドキュン！ ドキュン！

カンドリ

ギヤーツ！(と倒れる)

オザキ

どうだ？ 当たったか？

キョウタ

お見事。

キョウタ・オザキ・スズキ・クドウ・アツコが去る。  
反対側から、タカオが飛び出す。

タカオ

兄さん、僕とタブレットMはここだよ。早く助けに来て！

そこへ、ブルーナイトが飛び出す。

ブルーナイト

タカオ、よくやったな。さあ、タブレットをこっちに渡して。

タカオ

あんた、誰だ？

ブルーナイト

アイアン・キョウタだよ。おまえ、自分の兄の顔も覚えてないのか？

タカオ

嘘だ。あんたは兄さんじゃない。

ブルーナイト

タカオ、兄さんをかろうと怒るぞ。

タカオ

あんたはブルーナイトだ。兄さんは、そんな派手な服、着ない。

ブルーナイト

(自分の服を見て)しまった。着替えてくるのを忘れていた。ベリベリベリ(と仮面を剥がす)

タカオ

こっちに来るな！

ブルーナイト

やかましい！こうなったら、実力でタブレットを奪い取ってやる。

タカオ

兄さん！早く助けに来て！

違う場所に、クドウとアツコが飛び出す。



クドウ  
アツコ  
タカオ  
ブルーナイト  
（上に向かって手を振って）おーい！ タカオくん！  
（上に向かって手を振って）こっちだよ！ ビルの下！  
クドウさん！ お願いします！（とタレットを投げる）  
ブルーナイト。どけ！（とタカオを押し退けて飛び降り、クドウに）おい。

違う場所に、オザキとスズキが飛び出す。

オザキ  
スズキ  
クドウ  
ブルーナイト  
オザキ  
タカオ  
クドウ  
ブルーナイト  
（下に向かって手を振って）おーい！ サラリーマン！  
（下に向かって手を振って）こっちだよ！ 屋上！  
刑事さん！ うりやーっ！（とタレットを投げる）  
またしても。どけ！（とクドウを押し退けて飛び上がり、オザキに）おい。  
弟！（とタレットを投げる）  
クドウさん！（とタレットを投げる）  
刑事さん！（とタレットを投げる）  
おまえら、いじめっ子か！

そこへ、キョウタが飛び出す。

キョウタ  
ブルーナイト  
キョウタ  
ブルーナイト  
キョウタ  
（ブルーナイト、おまえの相手は俺だ！  
ブルー・ビーム！  
おおーっ！（と苦しむ）  
秋の風物詩攻撃、その一。恐怖の玉入れ競争！（と玉を投げる）  
おおーっ！（と苦しむが、カゴを背負って玉を受け止める）

ブルーナイト  
キョウタ  
ブルーナイト  
キョウタ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
オザキ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
タカオ  
アツコ  
クドウ  
アツコ

その二。悪魔のサンマ焼き！　パタパタパタ。（とサンマを焼く）  
ゴホッ、ゴホゴホゴホッ。（とむせる）  
その三。地獄のお神輿！　それ、ワッショイ、ワッショイ！（と手を振る）  
おおうっ！（とお神輿を担いで）重ーい！  
ハニー、どうしよう。このままだと、アイアン・キョウタがやられる。  
そんなこと言われても、こんな展開になるなんて思ってたし。そう  
だ、これ！（とタブレットWを取り出す）  
アライグマ・タブレットか？  
こんなもの持っても、何の役にも立たないか。  
大丈夫、立派な武器になるよ！  
えっ？  
（上に向かって）刑事さーん！  
（上に向かって）刑事さーん！  
（下に向かって）どうしたー！  
（下に向かって）どうしたー！  
（上に向かって）私の合図で、そのタブレットを――  
（上に向かって）私の合図で、そのタブレットを――  
（上に向かって）ブルーナイトめがけて投げてください！  
（上に向かって）ブルーナイトめがけて投げてください！  
（クドウに）何のために？  
ブルーナイトに、腋の下を開けさせるんだ。  
そんなことして、一体何になるの？  
だから、ブルーナイトの弱点は腋の下なの。

アツコ  
クドウ  
オザキ  
タカオ  
クドウ  
キヨウタ  
クドウ  
キヨウタ  
クドウ  
キヨウタ  
キョウタ  
オザキ  
タカオ  
クドウ  
タカオ  
キョウタ  
クドウ  
クドウ

いくら何でも、バカバカしすぎない？ 作者が聞いたら、怒るよ。  
何言ってるんだ。物語を決めるのは作者じゃない。僕たち、登場人物だよ。  
（下に向かつて）わかった、やってみよう！  
（下に向かつて）わかった、やってみよう！  
アイアン・キョウタ、聞こえるか？ 聞こえたら、サインをくれ。  
（戦いながら両腕で円を作る）  
チャンスは一度だけだ。僕と刑事さんが、アライグマ・タブレットをブル  
ーナイトめがけて投げる。当然、ブルーナイトはタブレットを取ろうとし  
て両手を上げる。その時、あいつの腋の下をくすぐるんだ。聞こえたか？  
（戦いながら両腕で円を作る）  
戦ってる最中に、ヘンなポーズを取らせてごめんなさい。  
（戦いながら首を横に振る）  
きっかけはあんたに任せる。あんたがゴー・サインを出したら、タブレッ  
トを投げる。それでいいか？  
（戦いながら両腕で円を作る）  
（下に向かつて）おい、サラリーマン！  
（下に向かつて）おい、サラリーマン！  
（下に向かつて）合図はまだ？  
（下に向かつて）合図はまだ？  
（上に向かつて）もうすぐです！  
（上に向かつて）もうすぐです！  
（戦いながら両腕で円を作る）  
今だ！（とタブレットを投げる）

オザキ  
キョウタ  
ブルーナイト  
キョウタ  
ブルーナイト  
ブルーナイト  
六人  
よーし！（とタバレットを投げる）  
あーっ！（とタバレットを指さす）  
えっ？ あーっ！（と両手を伸ばす）  
アイアン・フィンガー！ コチヨコチヨコチヨ！  
ワハ、ワハ、ワハワハハ！ ピシ、ピシ、ピシピシピシ……  
ドッカーン！

ブルーナイトが消える。

クドウ  
オザキ  
スズキ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
アツコ  
クドウ  
ハニー！（とアツコに抱きつく）  
（スズキに）俺たちも抱き合うか？  
気持ちだけにしておきましょう。  
結局最後まで自分の見せ場が作れなかった。悔しいけど、完敗ね。  
完敗って、誰が誰に負けたの？  
作者が登場人物に負けたの。私はこの物語の作者なんだ。  
あ、そう。  
驚かないの？  
最初からおかしいと思ってたんだ。女は君しかいないし、三つの物語が鉢  
合わせになってもあんまり驚かなかったし、それに……  
それに？  
君だけ、名前を言ってないだろう？  
私の名前はオオニタアツコ。この名前は、原稿用紙の一枚目に書いてある。  
誰かが気づくかもしれないと思って、今まで隠してたんだ。

クドウ  
アツコ

クドウ

アツコ

クドウ

アツコ

クドウ

オザキ

アツコ

キョウタ

アツコ

クドウ

そこへ、ブルーナイト・カンドリ・シシド博士が飛び出す。

クドウ

キョウタ

オザキ

八人

それで僕にハニーって呼ばせてたのか。

私は私自身を主人公にした物語を書きたかった。最初はただのOLだけど、最後は私の大活躍で事件を解決するつもりだったんだ。

残念だけど、君が大活躍しなくても、解決できちゃった。親はなくても子は育つ。作者はいなくても登場人物はガンバルんだ。

ううん、この物語の作者は私じゃない。えっ？

あなたたちだよ。あなたたちがこの物語を作ったんだ。

それは違う。あなたたちじゃなくて、私たち。君を含めた、登場人物全員だよ。

さあ、帰るか、サラリーマン。どこへ？

また誰かが、読み始めるかもしれないから。どこへ帰るの？ 決まってるだろう。物語の始まりへ！

それは――

それは――

それは――

十月の、ある風の強い日のことだった！

アツコを残して、全員が去る。

オザキが現れる。車に乗り、エンジンをかける。  
キョウタが現れる。バイクにまたがり、エンジンをかける。  
クドウが現れる。電車に乗り、吊り革に手をかける。

オザキ (勢いよくカーブを曲がる)  
キョウタ (勢いよくカーブを曲がる)  
クドウ (電車がカーブしてよろめく)  
オザキ (前の車を追い抜く)  
キョウタ (前の車を次々と追い抜いていく)  
クドウ (隣の人の携帯電話を見て、怒られる)  
オザキ (道路のデコボコでガタガタ揺れる)  
キョウタ (道路のデコボコでガタガタ揺れる)  
クドウ (電車を降りて歩き出す)  
オザキ (信号で急停車する)  
キョウタ (信号で急停車する)  
クドウ (自転車で急停車して走り出す)  
オザキ (イライラしている)  
キョウタ (イライラしている)

クドウ

(二人を悠々と追いついていく)

オザキとキョウタが去る。クドウの自転車がアツコに近づいてくる。アツコがゆっくりと振り返る。新しい物語の始まりである。

∧ 幕 ∨